

2021年度グローバル・コミュニケーション学部
教育、研究、社会貢献活動に関する自己点検・評価結果について

1. 教育活動

本学部では開設以来、シラバスに記載した授業内容や到達目標を踏まえ、個々の学生にとって最大限の学びが得られる環境の実現に努めてきた。演習系、講義系、いずれの授業においても、クラス・ディスカッション、ペアワーク、グループワークといったアクティビティを設け、積極的な参加を促すと同時にきめ細かいフィードバックを与え、主体的な学びの場を創出している。初年次教育が特に重要という考えから、本年度も1年次生の授業出欠状況に関する情報共有を組織的に行い、必要な学生には個別指導を行なった。また2017年度に策定した「成績不振及び長期欠席学生に対する個別指導の指針」に基づき、全コースで一貫した形で学生指導にあたった。

コロナ禍により、前年度に続いて本年度も対面授業とオンライン授業が併用される状況であった。十分な学修の機会と効果が得られるよう、各コースで一層の努力が行われた。日本語コースでは、コロナ禍により入国が叶わない1年次生が多くいたことから、前年度に導入した学部設備を活用したハイフレックス型授業を実施するなどの工夫が行われた。英語コースと中国語コースでは海外提携校での留学プログラム(SA)に1年間参加することを必須としている。2年次の春学期に開始される英語コースのSAでは、春学期中の授業がすべてオンラインとなった。秋学期には「特例渡航」のもとで多くの学生が現地での授業に参加したが、引き続き国内でオンライン授業に参加した学生もいた。2年次秋学期に開始される中国語コースのSAもオンラインでの開始となった。ただし台湾師範大学では3月中旬に現地でのSAを再開することができた。両コースでは個々の学生との連絡を密に行うとともに、多様な学びの機会を確保するため代替科目を設けるなどして、コロナ禍においてもカリキュラム・ポリシーに合致したSAとなるよう努めた。

学生が自ら企画したプロジェクトを遂行する4年次の必修科目「Seminar Project」でも、コロナ禍による制約はあったが、学生の主体的な取り組みと担当教員の指導により、各プロジェクトが成功裏に終わった。また4年次のゼミ科目に関しては、2019年に学部全体のアセスメントポリシーを策定し、各ゼミでの論文執筆を4年間の学びの集大成として位置付けている。これに関連する活動として、本年度はゼミごとの成果や課題を報告書にまとめ、継続的な改善につなげる取り組みを行った。

正課科目以外の教育活動としては次のようなものがあった。本学部の教員・学生で構成されるグローバル・コミュニケーション学会の小冊子『Cosmos』発行に加え、「Welcome to GC」と称する受験生・高校生向けの学部紹介イベントや、日本語コースの留学生と英語・中国語コースとの交流を促進する「タンデム・パートナー」制度を通じた活動を行なった。また、就職セミナーの開催やインターンシップ・プログラムの提供を通じて、学生がキャリアビジョンを形成するための指導やサポートを行った。

以上の結果として、2021 年度も「高度な外国語運用能力を駆使して facilitator、negotiator、administrator として活躍できる国際人を養成する」という本学部のディプロマ・ポリシーを達成できたと自負している。2022 年 3 月には第 8 期生（2018 年度生）が卒業したが、高度な外国語コミュニケーション能力、異文化理解力、問題発見・解決能力を身につけた本学部の卒業生は、社会でも高く評価されており、2021 年度も好調な就職状況であった。また英語コースでは 2017 年度 4 月より教職課程が開設され、次世代の英語教育を牽引する中学校、高等学校英語科教員の育成を行なっている。その成果として、本学部英語コースの教職課程を履修した学生の中から、前年度に引き続き、実際に中学・高等学校で英語教員・教諭の職につく学生を送り出すことができた。

2. 研究活動

本学部の教員は言語学、社会科学、教育学、文化研究、文学、歴史、ビジネス・コミュニケーションなどの諸分野で、著書や論文の執筆に加え、書評、翻訳、学会発表、査読、学会運営といった活動を通して、活発に研究活動を行った。また、グローバル・コミュニケーション学会の学会誌『コミュニカーレ』第 11 号が 2022 年 3 月に発行された。

3. 社会貢献活動

多くの教員がそれぞれの専門分野の学会などで役員や委員の職につき、学外の社会貢献活動に積極的に関わった。また、教科書の執筆、講演会や研修会での講師担当、有識者会議への参加などを通じて、研究成果を社会に還元する活動を行った。